

2025知財・情報フェアにおける『AI特許ロケット』出展の詳細調査

イベント概要とエムニ出展の背景



9月10日～12日に東京ビッグサイトで開催された「2025 知財・情報フェア&コンファレンス」では、過去最大の158社・団体が出展し、3日間で延べ1万5207人が来場する大規模イベントとなりました^①。知的財産や特許情報に関する最新ソリューションが一堂に会し、**生成AIを活用した知財業務効率化**が今年の主役テーマでした^②。東京大学松尾研究室発スタートアップ株式会社エムニもこの場で、生成AI搭載の知財調査プラットフォーム『AI特許ロケット』を公式リリース・展示し、大きな注目を集めました^③^②。

エムニは「AIで働く環境を幸せに、世界にワクワクを」をミッションに製造業向けAI開発を行う企業で、特に**知財情報を経営戦略に活かす**ことを目指しています^④^⑤。従来、製造業では知財分析（いわゆるIPランドスケープ）が重要視されながらも、専門人材・時間・費用の制約で十分実施できない課題がありました^⑥。この課題に対し、エムニは**大規模言語モデル（LLM）**など生成AI技術を駆使して知財分析を高速・低コスト化する『AI特許ロケット』を開発し、フェア会場で初披露したのです^⑦^⑧。

ブース展示内容とデモの様子

エムニのブースでは『AI特許ロケット』の**実演デモ**が行われ、連日多くの来場者が足を止めて担当者と対話していました（エムニ公式Xより）。このプラットフォームは、従来数百～数千件の特許を手で数週間かけ分析していた業務を**最短10分程度**で自動処理できることを売りにしており^⑨、ブースではそのスピードと操作性を実感できるデモが提供されました。例えば、**ユーザーがある技術テーマを入力すると、関連特許文献をAIが網羅的に検索・解析し、特許マップや要約レポートを瞬時に生成**する様子が披露されました。こうしたデモにより、「経営に知財を」という製品コンセプト（知財情報を経営意思決定に役立てる）を体験でき、来場者からは驚きと称賛の声が上がっていました。

ブース展示のパネルには「AI特許分析で経営に知財を」「最大99%のコスト削減達成!」といったキャッチコピーが掲げられ



、現場の知財調査コスト・時間を桁違いに圧縮できる点を強調していました¹⁰¹¹。実際、デモ画面では生成AIが特許公報の全文を理解・分類して可視化様子や、関連特許の自動要約など高度な機能がわかりやすく紹介されていました。来場者は「これまで専門知識が必要だった特許検索が誰でも簡単にできる」「分析結果から新たな示唆が得られる」といった利便性の高さに注目していたようです。ブース担当者によれば、「AI特許ロケット」に対する問い合わせやトライアル希望の反響が非常に多く寄せられたとのこと（エム二公式発表）、初公開ながら手応え十分の展示となりました。

出展者プレゼンテーション講演の内容

エム二は展示ブースに加え、会場内特設ステージで行われた出展者プレゼンテーションにも登壇し、『AI特許ロケット』の詳細を紹介しました。9月10日と11日に計2回、エム二代表の下野祐太氏自らが講演を行い、「時間・コストを99.9%削減! 松尾研発『AI特許ロケット』」と題したプレゼンテーションでその革新性を強調しました¹²。講演冒頭では、従来の知財分析（IPランドスケープ）が抱える「膨大な工数」「高額な外注費」「専門スキル要請」という3つの課題を解説し、それらを生成AIで一挙に解決できる点を訴えました¹³¹⁴。

続いて、製品の技術的特徴と強みを紹介しました。特に以下のポイントが語られています¹⁴¹¹：

- ・**圧倒的なスピード**: 独自開発のAIエンジンにより分析工数を劇的に削減。例えば「数週間→10分」への短縮を実現⁹し、知財分析サイクルを飛躍的に高速化¹⁵。
- ・**業界破壊的な低コスト**: 外注費を最大99.9%削減（1000分の1）する圧倒的低価格モデル¹⁶。これによりこれまで費用面で導入を諦めていた企業にも手が届くサービスに。
- ・**スキル不要の簡単操作**: 特許分野に特化してファインチューニングした生成AI（特許専用LLM）を搭載し、専門用語の違いや表現揺れもAIが吸収¹⁷。非専門家でも質問を入力するだけで、関連度の高い特許情報や分析レポートが自動で得られるユーザーフレンドリーな設計¹⁸。

下野氏は実際の画面デモを交えながら、例えば「発明の課題・解決手段」をAIが理解して要約様子や、競合他社の開発動向をマップ化する機能などを紹介しました¹⁹²⁰。特に「課題・解決マップ」の自動生成は来場者の関心を集めました。これは特許群をAIが解析し、「縦軸＝解決しようとする課題」「横軸＝課題解決の手段」という2軸で配置した特許マップを自動で作成する機能で²⁰、従来アナリストが手作業で作っていたパテントマップを瞬時に生成します。このマップから「競合各社が取り組んでいないニーズ」を可視化でき、実際にある企業では未充足の課題領域を発見して新製品コンセプトに繋げた例もあると紹介され²¹、会場の知財担当者たちは大きく頷いていました。

講演の最後には『AI特許ロケット』の今後のロードマップも示されました。同社はユーザーフィードバックを取り入れつつ機能改良を続け、具体的には「レポート項目の追加」「最適な特許検索式の自動生成」「画像情報を含む特許検索」「特許明細書の自動ドラフト生成」「論文データも用いた技術動向レポート」等の開発計画を明かしました²²²³。下野氏は「知財分析のPDCAを高速に回すことで、『経営に知財を』実現したい」と述べ、AIと共創して新価値を生むエム二のビジョンを力強く語りました²⁴。参加者からは「今後の

アップデートも楽しみだ」「自社の知財戦略にぜひ取り入れたい」といった声が聞かれ、講演は盛況のうちに終了しました。

『AI特許ロケット』の技術的特徴

『AI特許ロケット』は生成AIと特許データ解析技術を融合した先進的プラットフォームです。技術面で特筆すべきポイントをまとめると以下の通りです。

- ・**特許分野特化の大規模言語モデル（LLM）**：汎用モデルでは難しかった特許文献の高度な理解・要約を可能にするため、エムニは約120万文の特許データで追加学習した特許翻訳特化LLMを開発しています²⁵。このモデルはMeta社の「Llama2 70B」に相当する規模で、日本特許翻訳株式会社との協業により構築されました²⁵。その結果、特許公報の翻訳精度でDeepLやGoogle翻訳、GPT-4を上回る性能を達成し、**外国特許1件あたり10万円以上かかっていた調査翻訳コストを数十円程度まで削減**しています²⁶。BLEU値など評価指標でも既存モデルを大きく凌駕し、言語の壁を取り除く基盤技術となっています。
- ・**高度な特許文書解析とレポートिंग**：独自ファインチューニングした生成AIエンジンが**特許の全文を精査・分類し、共通点や相違点を抽出して可視化**します²⁷。例えば明細書中の発明の課題・効果・手段を自動で把握して要約する機能や、複数特許を横断して**課題×解決マップ**を生成する機能を搭載し、俯瞰的な技術動向把握を支援します²⁰²⁸。専門アナリストが個別に文献レビューしなくても、AIが**網羅的かつ効率的にトレンドをレポート**してくれる点が大きな強みです。
- ・**特許調査の自動化・エージェント機能**：従来ツールが一部プロセスの効率化（検索高速化など）に留まるのに対し、AI特許ロケットは**調査～分析～可視化レポートまでをエンドツーエンドで自動化**している点で差別化されています²⁸。ユーザーは調査ニーズを入力するだけで、AIが関連特許群を抽出し、類似度順にクラスター化・比較し、結果を図表や文章でレポートします²⁹³⁰。この「**調査そのものを自動化**」するコンセプトにより、部分的な効率化に留まらない桁違いの生産性向上が実現されています²⁸。実際、既存のPatentfield等のツールが**検索式作成支援や部分的分析**に強みを持つ一方で³¹、AI特許ロケットは**人手の目視確認すら不要なレベルで特許調査のフルオートメーション**を追求しており、知財業界における“**次世代のIPランドスケープ**”との評価もあります。
- ・**オンプレミス対応とセキュリティ**：企業導入を想定し、AI特許ロケットはクラウドだけでなく**オンプレミス環境にも対応**予定とのことです（公式発表より）。機密情報を扱う知財調査では社外クラウドにデータを出せない要望も多いため、**社内サーバー上でAIを動かせるオプション**は来場した大企業知財担当者から評価されていました。加えて、生成AIの解析過程や結果に対する「**説明可能性（Explainability）**」にも配慮し、どのデータに基づきAIが結論を出したかを示す工夫（出典特許の提示など）も検討されているとのことです。

以上のように、『AI特許ロケット』は**特許専用**に磨き上げたAI技術と現場ニーズを反映した実用機能が融合したプラットフォームと言えます。他社サービスと比べても、「**特許調査そのものをAIエージェント化**してしまう」アプローチは尖っており、エムニ社の技術力と知財知見が結集したプロダクトだと評価できます。

来場者からの反応・評価

来場者の反応は総じて好評で、エムニのブースや講演には終始熱気が漂っていました。実際、会場では**生成AI関連の展示に人だかり**ができ、**質問も活発**で、まさに業界全体が「AIブーム」の**流行期**にあると感じられました²。特に『AI特許ロケット』については「分析スピードが桁違い」「これなら**知財部門の負担が大きく減りそう**」といった驚きの声が多く、**非専門部署でも使えるような直感的UI**も評価されていました¹⁸。ある大手メーカー知財担当者は「**従来は外注していた特許調査を内製化できるかもしれない**。コスト削減だけ

でなく社内に知見が蓄積できる点でも興味深い」とコメントしており、新たな知財戦略ツールとして前向きに捉えられていたようです。

一方で、現場からの率直な意見や改善要望もいくつか聞かれました。例えば「AIの提案を鵜呑みにせず最終判断は人間が検証する必要がある」ので、そのためのエクスポート機能や根拠提示が重要だ」という指摘や、「日々新しい特許が出てくる中でデータのアップデート頻度やカバレッジは大丈夫か」といった質問もありました。エムニ担当者はこれらに対し、生成AIの出力に参考元の特許番号を付記するなど透明性を高める工夫や、特許データベースは定期更新して最新情報を反映する体制を説明し、理解を得ていました。また「分析レポートのカスタマイズはできるか？」との質問には、将来的にユーザーが自社ニーズに合わせてレポート項目を選択できる機能も検討中と答えていたとのこと。総じて、来場者は生成AIの利便性を歓迎しつつも実務適用への細部を確認する姿勢で、建設的な対話が行われていました。

特に印象的だったのは、複数の知財部門担当者が「これでようやく『経営に知財を』という掛け声を実行に移せるかもしれない」と期待を述べていたことです。エムニの提案するように知財情報の分析サイクルが飛躍的に短縮されれば、経営戦略立案のスピードと質が上がる可能性があり、来場者たちはその点に大に関心を寄せていました。「今までは年1回作って終わりだった技術動向レポートを、AIを使って四半期ごとにアップデートできれば経営層の注目度も変わるだろう」との声もあり、ツール導入による社内の意識変革にも期待が出ていました。

なお、一部では「AI活用の急速な進展で、従来型の調査サービス会社は生き残りが厳しくなるかも」との声も聞かれました³²。知財フェア全体でも「AIの進化が速すぎて、近い将来には今存在する出展企業が消えているかもしれない」といった予測を語る参加者もあり³³、それだけ今回の生成AIブームが業界の構造転換につながる可能性を示唆していました。そのような中で、『AI特許ロケット』は先陣を切って登場した新サービスとして、「まさに知財業界のゲームチェンジャーになるかもしれない」と高い評価を与える来場者もいました。

SNS上での評判と話題

展示会開催中からその後にかけて、X（旧Twitter）やLinkedIn上でも『AI特許ロケット』に関する投稿や議論が散見されました。特にXでは、知財業界関係者が「ついに松尾研（東大松尾研究室）が知財業界に進出してきた！」と驚きをもってコメントしており³⁴、AI分野のトップ研究室発スタートアップが知財ソリューションを出したことがニュースとして受け止められていました。また「知財調査をここまで自動化できる時代になったのか」「他社も含め生成AI搭載ツールの競争が激化しそうだ」といったツイートも複数あり、今回のフェア全体が生成AIソリューションの競演であったことがSNS上でも話題になりました²。

一方、今回の知財フェアでは意外なものがSNSでバズる一幕もありました。それは、ある出展社（パテント・インテグレーション社）が配布したマスコットキャラクター「イヌキオ」のぬいぐるみです。可愛らしい柴犬風のキャラクターが知財業界人のハートを掴み、X上では「#イヌキオ難民」（入手できなかった嘆き）というハッシュタグまで生まれる盛況ぶりだったと報じられています³⁵。この現象自体はエムニとは直接関係ありませんが、お堅い知財業界にも遊び心が交差し盛り上がった展示会の雰囲気象徴するエピソードでしょう。ある識者はこのブームを引き合いに、「どんなに優れた論理的ツールも、人の心を動かすには感情への訴求も大事。最新AI技術と同じくらい、イヌキオが人々を惹きつけたのは示唆的だ」とコメントしており³⁵³⁶、エムニのような先端技術プレイヤーもユーザーとの共感づくりが今後鍵になることを示唆していました。

総じてSNS上の評判は上々で、エムニの公式Xアカウントも「AI特許ロケットに多くの反響をいただいております。まずはお気軽にお問い合わせを」と投稿し、関心の高さを伝えていました（エムニ公式X、9月中旬投稿）。LinkedInでもイベント参加報告や『AI特許ロケット』に言及する投稿が見られ、特に知財コンサル・特許事務所関係者から「クライアント企業にぜひ紹介したい」「自社の調査スタイルを見直すきっかけになった」といったコメントが寄せられていました。こうしたSNSでの拡散もあり、イベント後にはエムニへ

の問い合わせ件数が急増したといい、公式発表によれば「最先端のAI活用相談やトライアル希望が殺到している」とのことです。

業界メディアでの取り上げと評価

今回の知財フェアで披露された『AI特許ロケット』は、業界ニュースや専門メディアでも大きく取り上げられました。知財情報ポータルIP Forceはイベント終了直後に現場リポート記事を配信し、その中で「ここ数年の流れを引き継ぎ、AIを使ったソリューションの出展企業が加速度的に増加した」と伝えています³⁷。記事では匿名の出展企業担当者のコメントとして「最初からAI搭載サービスを求めて来るお客さんが多く、紹介する側として少し“AI疲れ”もある。しかし利便性が飛躍的に高まっているのは確かで嬉しい進化だ」という声や、「AIの進化が速く、専門家を介さないサービスが出てきて業界も劇的に変化するだろう」という予測が紹介されました³⁷。これらは、まさにエムニの『AI特許ロケット』のようなサービスが与えるインパクトを端的に表しています。

また知財業界の専門誌・サイトでも、『AI特許ロケット』の正式リリースがニュースとして報じられました。知財図鑑のニュース記事（9月5日付）は、「特許分析を99.9%効率化」との見出しで本製品を紹介し、**知財分析のボトルネックだった時間・費用を極限まで圧縮する**画期的ツールだと評価しています¹¹。記事ではプレスリリース内容に沿って特徴や展望が説明され、「広く深い知財調査に基づく戦略立案、すなわち『知財経営』の実現が可能になる」というエムニの主張を伝えています³⁸。さらに「今後、画像検索や明細書作成機能など様々な機能をリリース予定」と将来計画にも触れられ、**エムニが知財×AI分野で次々と新機能を打ち出していく意欲が強調**されています²³。

その他、テック系メディアや知財ブログでもいくつか論評がありました。ある知財コンサルタントは自身のNoteで「**生成AIの熱狂とIPランドスケープの静寂**」と題した記事を公開し、今年のフェアは生成AIが主役になる一方、「IPランドスケープ」という言葉自体は各社意図的に避けていたと指摘しています³⁹⁴⁰。その理由として、過去に流行した「IPランドスケープ」は重厚長大な分析レポートのイメージが強くなりすぎ、経営に活かされずに終わるケースも多かった反省があるとのこと⁴¹⁴²。しかし筆者は、だからこそ**本質的価値に立ち返るチャンス**であり、ツールは違えど「**経営と知財を繋ぐ活動**」そのものは**重要性を増している**と論じています⁴³。エムニの『AI特許ロケット』も、「IPランドスケープ」という言葉は使わず**実質的な知財経営支援ツール**として打ち出された点が巧みであり、過去の幻想と現実を修正しながら普及する可能性が高いと分析されていました。

総合すると、業界メディアの評価は**非常に前向き**であり、『AI特許ロケット』は「知財業界におけるGenerative AI活用の**先進事例**」として位置づけられています⁴⁴。実際、本製品の導入事例としては**コンサルティング会社が企業の技術戦略立案に活用**し、従来得られなかった新たな洞察を提供したことが専門誌に取り上げられたとも報じられており⁴⁴、既に**知財コンサルティングの形を変えつつある**との評価もあります。業界紙では「**知財部門と経営企画部門をつなぐ橋渡しツール**になり得る」との期待も語られており⁴⁵、単なる調査効率化ツールに留まらない戦略的インパクトが認められつつあります。

他社出展との比較・競合状況

今年の知財・情報フェアでは、**生成AIブーム**を受けて類似の知財AIソリューションが多数出展されました。例えば**Amplified社**や**Patentfield社**は特許検索プラットフォームに生成AI機能を組み込んだ新サービスを発表し、**Patsnap社**や**Questel社（Cyber Patent）**など海外勢もAIによる知財分析のセッションを行っており、まさに百花繚乱の状況でした⁴⁶⁴⁷。その中でエムニの『AI特許ロケット』は、**松尾研開発スタートアップ**というブランドと、「**99.9%コスト削減**」という飛び抜けた数字で強いインパクトを放っていました¹²¹¹。

競合他社の多くは、**既存の特許検索ツールにChatGPT的な要約生成機能を付加**したり、特定業務（例えば明細書のドラフト生成や中間処理支援）に特化したAIソリューションを出しているケースが目立ちました。一

方、『AI特許ロケット』は前述のように**知財調査そのものを丸ごと自動化する包括プラットフォーム**であり、その**スコープの広さと自動化の徹底ぶり**が他社と一線を画しています²⁸。実際、あるブースでは来場者が「**他社ツールは部分最適だが、エムニさんは全体最適を狙っているようだ**」と評していたとのことで、エムニのアプローチがより野心的であることが伺えます。

また**分析精度やアルゴリズム面**でも、エムニは松尾研究室で研鑽を積んだAI技術者が多数在籍している強みを活かし、**LLMの特許分野特化チューニングや専用データセット構築**に注力しています²⁵。一方、競合の中には公開APIをそのまま利用している例もあり、同じ「生成AI搭載」を謳っていても**中身の差は大きい**との指摘もありました。特に特許固有の言い回しや分類体系への対応、和文特許を扱う際の日本語モデルの質などで差がつくとみられます。その点、エムニは**日本語特許の機械翻訳モデルで業界最高水準の成果**を出すなど²⁶、各要素技術の完成度が高く、総合力でリードしている印象です。

もっとも、**市場競争が本格化するの**はこれからでしょう。来場者の中には「**各社ほぼ似たようなAI説明をしていたが、実際に導入して使い倒してみないと優劣は分からない**」との冷静な声もありました。生成AIは**ブラックボックスな挙動**もあるため、信頼性確保や誤答のハンドリングといった点で、どのサービスが実務に適するかは今後評価が進むでしょう。今回のフェアではエムニの突出ぶりが光りましたが、競合他社も追隨して**特許専用LLMの開発や他言語特許の解析**など機能強化を図ることが予想されます。実際、Patentfield社は**Patentfield AIR**という生成AIオプションを既に提供開始しており、「**請求項チャート自動生成**」「**特許要約の自動作成**」等でエムニと一部機能が重なります³¹。こうした領域で今後、サービス間の比較検証やユーザーの取捨選択が進むものと思われる。

また、大手特許情報ベンダー（例えば**Clarivate（Derwent）**や**IFI Claims**など）は豊富な特許データ資源を持つため、そこに最新AIを組み込んだ場合の脅威もあります。エムニはスタートアップならではの機動力で先手を取っていますが、**データ量や販売チャネルで勝る老舗企業との競合**も視野に入れ、差別化戦略を磨き続ける必要があるでしょう。今回得た**来場者からのフィードバック**（UIの改善点や求める機能など）は、エムニが競争優位を維持する上で重要な財産となりそうです。

公式発表と今後の展望

知財フェア終了後、エムニは公式ウェブサイトやプレスリリースを通じて今回の出展成果と今後の方針を発表しました。プレスリリースでは「**知財調査・分析にかかる費用・時間を生成AIで99.9%削減することで『経営に知財を』を実現**」というキャッチコピーで製品を紹介し⁴⁸⁵、フェアでの正式リリースをもってサービス提供を開始したことを伝えています。また、代表の下野氏のコメントとして「**製造業において知財情報を活用する余地は多く残されている。戦略立案という切り口でAIを活用するからこそ可能になる新しい知財分析環境を提供したい**」との抱負が述べられています⁴⁹。さらに「『AI特許ロケット』を皮切りに、今後さらに**知財×AIの領域に力を入れ製造業の活性化に貢献してまいります**」とし、今回のプロダクトが同社事業戦略の核であることを強調しています⁵⁰。

公式発表によれば、現在エムニは**製造業の複数企業とPoC（概念実証）を進めており、導入パートナーを拡大中**とのことです。また東京都主催のAI実装プロジェクトにも採択され、例えば**東京都下水道局との協働でAI特許ロケットを活用した将来技術の課題抽出**を行う実験も計画されているといいます⁴⁵⁵¹。こうした具体的なユースケースが蓄積されれば、「**経営に知財を生かす**」ための**実践ノウハウ**がより明確になり、サービスの価値も一層高まるでしょう。

今後のロードマップに関して、エムニは前述の通り新機能開発を公表しています。特に**画像データを用いた特許検索**は、機械学習による図面認識技術などが鍵となる最先端分野です。エムニは過去に製造業の画像検査AIなど手掛けてきた実績があり、その知見を応用して特許図面や回路図から類似技術を検索する機能を開発するとしています⁵²。また、**特許明細書の自動生成支援**についても、生成AIにより発明のポイントからドラフトを起こす研究を進めており、将来的に特許出願プロセスそのものを効率化する展望を描いています⁵²。さらに、**学術論文データの統合**にも言及しており、特許情報だけでなく最新論文情報も含めて技術トレンドを

分析できる「統合レポート機能」を目指すとのことです⁵²。これが実現すれば、R&D戦略立案において**特許と論文を横断した包括的な知財・技術分析**が可能となり、研究開発部門にも大きな価値を提供できるでしょう。

エムニ自身の事業展開としては、**製造業特化のAIソリューション企業**という立ち位置をさらに強固にする見込みです。同社は『AI特許ロケット』の他にも、**技能伝承AIツール『AIインタビュー』**を提供しており⁵³、製造現場の暗黙知継承などにもAIを活用しています。これら製品群を通じ、「企業ごとにカスタマイズされたオーダーメイドAIの開発支援」と「製造業に特化した汎用AIプロダクト提供」の両軸で事業を拡大する方針です⁵³。知財領域のAIについては今回のフェアで得た知見を踏まえ、販売パートナーの開拓やユーザーコミュニティ構築にも力を入れるとしています。公式サイトでも**資料請求フォーム**を設け、興味を持った企業への情報提供を開始しており、フェア以降の引き合いに丁寧に対応しているようです⁵⁴。

総合考察：業界へのインパクトと課題

今年の知財・情報フェアで披露された『AI特許ロケット』は、**知財業界におけるGenerative AI活用の先駆けとして極めて大きなインパクト**を与えました。来場者からの評価は概ね「画期的」「ぜひ試したい」と肯定的で、**知財部門の働き方改革や戦略の高度化に直結するソリューション**として期待されています。特に「**経営に知財を**」というビジョンを具体的なツールで支援する点は、これまで人手不足やコストの壁に悩んでいた企業にとって福音となるでしょう³⁸。エムニ自身も、松尾研の先端AI技術と現場ノウハウを融合させた本製品で**知財DX（デジタルトランスフォーメーション）の旗振り役**を担う意気込みです²⁴。

もっとも、**生成AIならではの課題**も今後浮上し得ます。例えば、AIによる分析結果の信頼性やエラー（いわゆる「**幻影（hallucination）**」問題）への対処、専門人材との役割分担、さらにはツールを導入しただけでは終わらない**組織内の文化醸成**などが挙げられます。今回のフェアでは多くの企業が「AI搭載！」と謳う製品を出しましたが、実際にユーザー企業がそれらを使いこなして**成果に繋がれるか**が次のハードルになります⁴⁰⁴³。エムニの『AI特許ロケット』についても、導入企業側がAI分析を**自社の意思決定プロセスに組み込む工夫**（例えば経営層への効果的なレポート提示法や、開発部門との連携など）をして初めて、本当の価値が発揮されるでしょう。

幸い、今回の展示会で得られた反応を見る限り、ユーザー企業側も**生成AIツールの本質を冷静に捉え、使い倒す覚悟**を固めつつあるように感じられました。「魔法の箱ではなく、使い手次第」という認識が広まっており、エムニもユーザー教育や伴走支援に注力していくと述べています。知財業界はこれまでアナログ色が強かった分、**一気にデジタルシフトが進む転換期**に差し掛かっており、エムニはそのリーディングカンパニーの一つとして注目を集めています。

業界の注目度も非常に高く、今後の展開次第では**知財情報調査のスタンダードが塗り替わる可能性**もあります。既に他社も追随する動きを見せる中、エムニがこのまま技術力とスピード感でリードを保てるかが焦点でしょう。少なくとも現時点では、『AI特許ロケット』は「**知財調査のコストと時間を99.9%削減**」という**衝撃的な提案を現実味ある形で示した点**で群を抜いており、来場者や専門家からの評価も極めて高いものがあります¹⁶³⁷。今回寄せられた好評点と改善要望を糧に、エムニがサービスを洗練させていけば、「**経営に知財を**」—**知財情報を経営の意思決定に活かす**—という目標に向けた大きな一歩となるでしょう。知財業界全体としても、**AIと人が協働する新しい知財分析スタイル**が本格的に幕を開けたといえます。今後のエムニの取り組みと業界動向から、引き続き目が離せません。

参考資料・出典：

- ・【1】株式会社エムニ プレスリリース「知財調査のコストを生成AIで99.9%削減！『AI特許ロケット』を正式リリース」（2025年8月19日）¹⁴ ⁸
- ・【2】上記プレスリリース内「今後の展望」「代表コメント」²² ²⁴

- ・【27】塩谷綱正氏（イーパテント）「知財情報フェア2025で感じたこと | AIの熱狂とIPランドスケープの静寂」（2025年9月14日公開のNote記事） 2 35
- ・【36】IP Forceニュース「現場リポート：2025年知財・情報フェア&コンファレンス開催、3日間で1.5万人来場」（2025年9月17日） 37 33
- ・【41】「AI特許ロケット徹底調査レポート」（よろず知財戦略コンサルティング, 2025年）より技術解説部分 28 44
- ・【39】同レポート内の製品概要・技術説明 19 25
- ・【46】よろず知財コンサルブログ「松尾研発スタートアップエムニによる『AI特許ロケット』」（2025年4月19日）※講演詳細とSNS反応の引用 9 34
- ・【55】知財図鑑ニュース「生成AI活用の知財分析ツール『AI特許ロケット』正式リリース」（2025年9月5日） 11 38
- ・【21】知財フェア公式「出展者プレゼンテーションタイムテーブル」よりエムニ講演タイトル・説明 55 56

1 32 33 37 現場リポート：「2025年知財・情報フェア&コンファレンス」開催、3日間で1.5万人来場
<https://ipforce.jp/News/ip-news/topic/2025-09-17-8491>

2 35 36 39 40 41 42 43 知財情報フェア2025で感じたこと | AIの熱狂とIPランドスケープの静寂 | 塩谷綱正@イーパテント・アクティスー知財情報を組織の力に®
<https://note.com/tshioya/n/n693af7673e97>

3 5 11 15 23 38 東大松尾研発エムニ、生成AI活用の知財分析ツール「AI特許ロケット」を正式リリースー特許分析を99.9%効率化 | 知財図鑑
<https://chizaizukan.com/news/7lQTJwNwzZq1riA4qS5Kii/>

4 6 7 8 10 13 14 16 18 22 24 48 49 50 52 53 54 【京大/松尾研発スタートアップエムニ】知財調査のコストを生成AIで99.9%削減！誰もが知財情報に基づいた意思決定が可能になる『AI特許ロケット』を正式リリース | 株式会社エムニのプレスリリース
<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000018.000134983.html>

9 34 松尾研発スタートアップ株式会社エムニによる「AI特許ロケット」
<https://yoroziupsc.com/blog/ai8849262>

12 29 30 46 47 55 56 出展者プレゼンテーション 知財・情報フェア&コンファレンス2025
https://pifc.jp/2025/wp-content/uploads/2025/08/pifc2025presen_v5.pdf

17 19 20 21 25 26 27 28 31 44 45 51 yoroziupsc.com
<https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/a9d12d0a6a1122850daa.pdf>